

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 25 日現在

機関番号：34511

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2009～2011

課題番号：21530631

研究課題名（和文）懐かしさを活用した支援 - 回想法の実践を通じた生きがいの追及 -

研究課題名（英文）Support provided by effectively using a sense of nostalgia

研究代表者

津田 理恵子 (TSUDA RIEKO)

神戸女子大学・健康福祉学部・准教授

研究者番号：80441202

研究成果の概要（和文）：特別養護老人ホーム入所者6名と地域高齢者18名に懐かしい品物がある研究室で回想法を試みると、介入後に生きがい感が上昇し特別養護老人ホーム入所者の認知機能と日常生活動作の改善が示された。継続支援として同窓会を開催すると腑活化した機能は維持され、地域高齢者は社会参加につながった。都市部と山間部で介入効果を比較すると居住環境の影響はなかった。回想法の普及活動時にアンケート調査を実施するとコミュニケーションの自信が向上していた。福祉関係者にアンケート調査を実施すると、回想法の技法を51.1%の者が知らないと答えていた。

研究成果の概要（英文）：Life review was attempted on 6 residents of special elderly nursing home and 18 elderly people living in the region in a research laboratory, where nostalgic articles were kept. As a result, sense of having a purpose in life improved, and cognitive function as well as day-to-day life activities shown improvement in the residents of special elderly nursing home. As a continued support, alumni reunion was organized which led to sustained reinvigorated function and social participation of regional elderly people. Upon comparing nursing benefits for urban area and mountain area, it came out that living environment had not impact. Administering questionnaire at the time of spreading awareness of life review improved confidence for communication. In the questionnaire survey conducted on welfare personnel, 51.1% of the respondents replied that they were unaware of the technique of life review.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：人文・社会

科研費の分科・細目：社会福祉学

キーワード：社会福祉関係・回想法・生きがい・高齢者

1. 研究開始当初の背景

(1), 研究の学術的背景

①、回想法の歴史回想法は、アメリカの精神

科医 Butler(1963)によって老年期の最終課題である人生の統合が達成できる可能性が開かれると提唱されて以降、高齢者の過去へ

の回想は積極的に行うことが望ましいという考えに転換された。我が国では 1990 年代に入り回想法研究がスタートし、保健・医療・福祉などの多岐にわたる分野で研究が行われている。

②、回想法研究の実状

先行研究において対象群を設け、評価尺度を用いて検証している文献が少なく、研究者によって使用している評価尺度や効果が示されている尺度が異なっている状況で、生きがいについては、評価尺度を用いている研究は見当たらず、回想法の効果を測定する尺度が明確でない状況や、対照群を設定した研究や長期的な調査を実施している研究も件数が少なくその効果は明らかになっていない点が多かった。さらに、回想法を活用することで介護者の精神的な負担感の軽減につながる効果について、評価尺度を用いてその効果を示した文献は見当たらなかった。

(2) これまでの研究成果を踏まえた経緯

2006 年から、恵那市の回想センターで地域住民を対象とした、クローズド・グループでの回想法実践に参加し、2008 年 2 月から特別養護老人ホームにおいて、クローズド・グループで回想法の介入を実践した。

特別養護老人ホームでは、高齢者にとって、生きがい感・抑うつ・感情・日常生活動作・認知機能・意欲に変化があるか確認するために、多層ベスライン (1 グループ 4~5 名×3 クールに介入時期をずれて) での介入を試み、2 ヶ月に 1 回、評価尺度を用いて調査を実施した。

その結果、介入直後に全てのグループで生きがい感と気持ちは上昇傾向で改善傾向が示され、抑うつ感も軽減傾向が示され、日常生活における意欲・動作・認知機能も改善傾向が示された。しかし、時間の経過とともに腑活化した機能は維持されないことが示された。介護者の負担感について回想法介入前・後に、評価尺度を用いて調査した結果、バーンアウト得点は若干であるが改善していた。

2. 研究の目的

本研究は、元気高齢者や認知症などの障害を背負った高齢者を対象に、回想法を介入手段として、懐かしさが及ぼす効果として生きがい感を中心に、介入直後の短期的効果だけでなく、長期的なスパンで評価尺度を用いて確認し、介入効果を明らかにするものである。さらに、応募者が取り組んできた回想法の実践結果を踏まえ、懐かしい記憶の想起において、引き出されたその人らしさを活かした支援を具体的に展開し、個別に応じた支援の重要性を示すことである。

(1)、研究期間内に明らかにすること

①、特別養護老人ホームでは、回想法の介入で賦活化された機能の維持に向けた具体的

支援の展開と、その効果を長期的に継続して明らかにする。

②、認知症高齢者への介入手段として、動作的介入を試みその効果を明らかにする。

③、地域在住高齢者での介入においては、山間部と都市部の高齢者への介入を試み、居住環境による差があるのかを調査を行い、明らかにする。

④、回想法の普及活動を行い、その効果を確認する。

3. 研究の方法

本研究では、回想法を用いて懐かしい記憶に働きかけ、その介入効果を検証するとともに、対象による効果の特徴と介入方法を整理することである。

(1)、特別養護老人ホーム入所者への回想法スクールの運営し、対照群と非対照群にわけ、対照群には回想法介入後の継続支援を展開し、長期的スパンによる生きがい感の調査を生きがい感スケール(K-1 式)にて調査する。

(2)、認知症高齢者への動作的回想法による介入効果として、認知機能・周辺症状の調査として、NM スケールと N-ADL を用いて調査する。回想法実践中の認知症高齢者の評価尺度を検討し開発する。

(3)、地域在住高齢者への回想法スクールの運営と回想法の介入効果を、農村部と都市部で生きがい感スケール(K-1 式)を用いて調査を実施する。

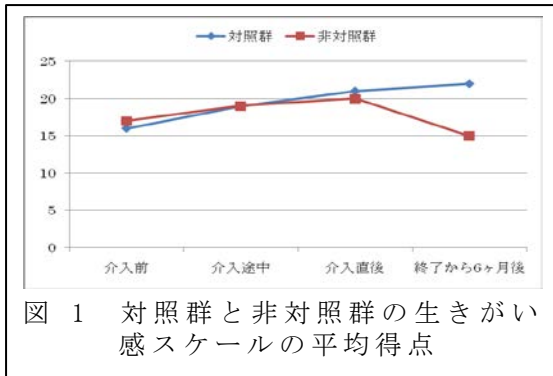
(4)回想法実践を通して得られた結果をもとに、回想法実践マニュアルを作成し、回想法の普及活動を行う。

4. 研究成果

(1)、回想法スクール終了後に、継続支援を実施しなかった非対照群として、特別養護老人ホーム入所者(平均年齢±標準偏差 83.1±2.3 歳、女性 2 名と男性 1 名)に、平成 23 年 5 月から回想法スクールの毎月 1 回合計 5 回開催した。その結果、生きがい感スケール(K-1 式)の得点(図 1)をみると、介入前から介入後に改善したが、介入終了から 6 か月後に下降しており、一時的に上昇した生きがい感は維持されなかった。

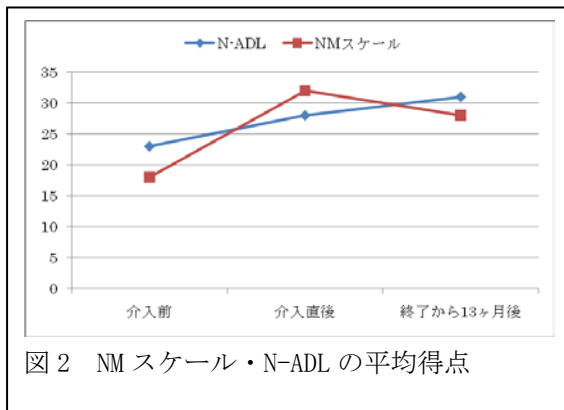
一方、継続支援の対照群である特別養護老人ホーム入所者(平均年齢±標準偏差 94.7±3.5 歳、女性 3 名)に、平成 22 年 5 月から毎月 1 回合計 10 回、回想法スクールの開催し、継続支援として施設内でも思い出に働きかけ、回想法スクールの同窓会を開催した結果、生きがい感はさ

らに上昇していた。



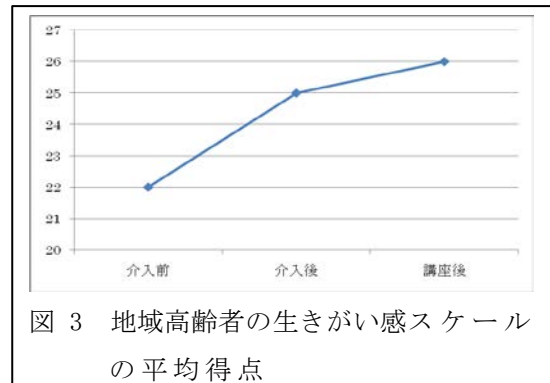
(2)、特別養護老人ホーム入所者を対象とした回想法スクールの運営において懐かしい動作を行う動作的回想を取り入れ、行動観察尺度(良い状態と良くない状態の評価スケール)を開発し使用した。動作を取り入れたことで、言葉では理解できないことも一瞬にして当時の記憶が蘇る場面が多く、行動観察尺度の結果から回を重ねるごとに得点が増え、自発的な発言回数が増え会話が長文化することが確認できた。

NM スケールと N-ADL の得点(図 2)をみると、介入後に改善しており、認知症の周辺症状が軽減する中で意欲的な行動が増加することが示された。さらに、継続支援を実施した群では、介入後時間を経過しても、腑活化した N-ADL の得点はさらに向上していた。一方、N-ADL の得点は若干下降していたが比較的維持されていた。

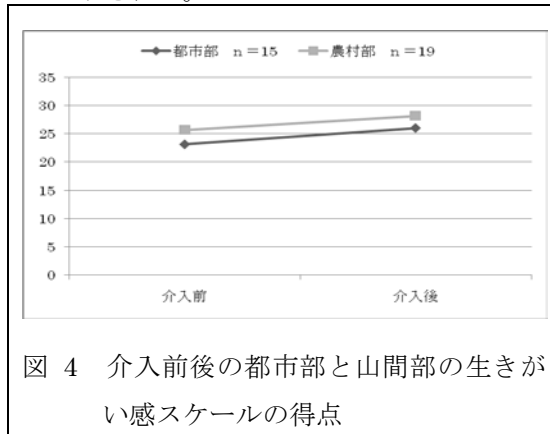


(3)、地域に在住している元気高齢者への回想法スクールの平成 21 年から平成 23 年までの期間で、4 グループ(平均年齢±標準偏差 70.7±6.4 歳、男性 5 名女性 13 名)に実践しスクール終了後に同窓会を合計 6 回開催した。その結果を、生きがい感スケール(K-1 式)の得点で見ると(図 3)、生きがい感は介入前から介入後に改善し、介入終了後も改善された生きがい感は維持され、新たに形成されたグループの力を活用し社会参

加につながった。現在、回想法ボランティアとして社会参加できるよう回想法ボランティア養成講座を開催し活動中である。



居住環境による回想法の効果の差を確認することを目的に、都市部と山間部の地域在住高齢者の効果を比較検討した。その結果、生きがい感スケール(K-1 式)の得点(図 4)において、居住環境に関わらず生きがい感が上昇することが確認でき、居住環境にかかわらず 1 人暮らし高齢者の生きがい感が低いことが示された。



(4)、回想法の普及活動として、回想法実践マニュアルを作成し講座を開催し、調査した結果(図 5)、講座後に 96.4%の者がコミュニケーションの自信が向上したと答えており、回想法の技法を習得することでコミュニケーションスキルの向上につながることが示された。

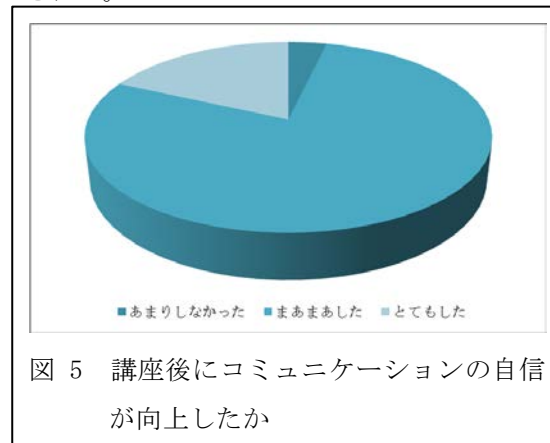


図 5 講座後にコミュニケーションの自信が向上したか

回想法の認知度を把握する目的で、平成22年12月に近畿2府4県の高齢者福祉施設・事業所から無作為抽出した180か所に郵送法で調査した結果、51.1%が回想法を知らないと答え、認知度が低いことが示された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計10件)

- ①津田理恵子、コミュニケーションのスキルアップを目指して - 回想法講座前後の職員の意識調査を通して -、日本自立支援介護学会、査読有、6(2)、2012、140-145.
- ②津田理恵子、逆デイサービスの効果 - グループ回想法を活用した認知症高齢者への支援 -、日本看護福祉学会誌、査読有、17(2)、2012、105-118.
- ③津田理恵子、グループ回想法の効果と社会参加支援への取り組み - 地域で生活する元気高齢者の能力を活用して -、神戸女子大学健康福祉学部紀要、査読有、4、2012、21-32.
- ④津田理恵子、都市部と山間部における回想法の効果の比較 - 地域に在住している高齢者の生きがい感を比較して -、介護福祉研究、査読有、19(1)、2012、7-11.
- ⑤津田理恵子、行動観察スケールを活用した認知症高齢者への回想法の効果測定、行動療法研究、査読有、37(2)、2011、77-90.
- ⑥津田理恵子、ソーシャル・グループワークの実践 - グループ回想法の介入効果 -、神戸女子大学健康福祉学部紀要、査読有、3、2011、35-42.
- ⑦津田理恵子、回想法介入による介護職員のバーンアウトの変化 - 特別養護老人ホームでの回想法介入を通して -、介護福祉研究、査読有、18(1)、2010、27-31.
- ⑧津田理恵子、グループ回想法の介入効果 - 特別養護老人ホーム入所者の生きがい感 -、厚生指針、査読有、56(10)、2009、34-40.
- ⑨津田理恵子、特別養護老人ホームにおける回想法の実践 - 多層ベースラインでの介入効果 -、神戸女子大学健康福祉学部紀要、査読有、2、2010、19-29.
- ⑩津田理恵子、特別養護老人ホームにおける回想法の実践 - クローズド・グループによる介入効果 -、日本看護福祉学会誌、査読有、14(2)、2009、109-123.

[学会発表] (計4件)

- ①津田理恵子、特別養護老人ホームからの逆デイサービスの効果 - グループ回想法を活用して -、2011年度関西社会福祉学会、2011年2月26日、大阪大谷大学(大阪府).

- ②津田理恵子、地域における回想法の実践、第23回日本看護福祉学会全国学術大会、2010年7月4日、日本赤十字広島看護大学(広島県).

- ③津田理恵子、ソーシャル・グループワークとしての回想法 - 生きがい感の向上と新たな人間関係の形成を目指して -、第18回日本介護福祉学会大会、2010年9月19日、岡山県立大学(岡山県).

- ④津田理恵子、グループ回想法の介入効果 - 多層ベースラインでの生きがい感 -、第22回日本看護福祉学術大会、2009年6月21日、滋賀県立大学(滋賀県).

[図書] (計1件)

- ①津田理恵子、現代図書出版、懐かしい記憶から引き出す生きがい - 特別養護老人ホームにおける回想法の介入効果 -、2012、289.

[その他]

ホームページ等

<http://www.yg.kobe-wu.ac.jp/wu/semi/tsuda/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

津田 理恵子 (TSUDA RIEKO)

神戸女子大学・健康福祉学部・准教授

研究者番号：80441202